
カフェオレ

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カフェオレ

【Nコード】

N0644M

【作者名】

きみよし藪太

【あらすじ】

最後の約束は守らなかった。

最後の最後に、あなたには会いに行かなかった。

他の女を選んだあなた。買ってあった切符は無駄になった。

食欲ってなんだろう、あなたの身体以外口にしたいものなんてないのに。

約束の二時に、わたしは彼の家へ出掛けなかった。

さよならをするはずだった日曜日の二時に、わたしは彼の家へ出掛けなかった。

他に大切な人が出来たのだと、風邪気味の低い声で告げた彼の声を耳にしてからもう五日が経つ。週の頭にそんな事を聞かされてしまったので、休みになる日曜日までは時間が有り過ぎた。電話を何度もして、わたしよりその女が大事なのかと、わたしは誰よりもあなたを愛している自信があると、わたしを選びなさいよと何度も何度も言ったのだけれど、彼の気持ちは揺らぐだけで移行しなかった。わたしには。わたしの方へは。泣き叫んだのは二度。受話器の向こうで困る彼の空気が流れてくるのが分かった。

大好きで大切な人をそれ以上苦しめる事が、わたしには出来なかったから。

さよならを告げられる人よりも、本当はそれを告げる人の方が苦しい事を、わたしは知っていたから。

日曜日の二時に、わたしは彼の家へ出掛けなかった。遠距離恋愛で心まで離れてしまうなんて、チープな現実が痛かった。

本当はまだ気持ちが固まりきっていないであろう彼に会って、泣き喚く事だって出来たのに。

出来たのに、わたしはそれをしなかった。

愛していたから。

愛しているから。

今も、これからも、ずっと。

その時間に何をしていたかといえば、女友達と温泉に出掛けていた。

「今週の射手座、ラッキー度一番らしいよ」

「へえ」

「なに気のない返事してるのよ、あんた射手座だったじゃない」

「そんな事もあったわね」

「そんな事もあったって、星座は一生変わらないじゃないの」

昼過ぎのその変な時間に、温泉はなかなか混んでいた。それでも冬の腕が大地を抱いてしまっているこの時期にはさすがに外の露天風呂を使用する人間は少なく、わたしは友達とあたたかいのに寒いというまるで自分の精神状態のような温泉に浸かっていた。あまり泣いたのできつと涙の分の二キロが体内から無くなっているのだろう。ダイエットもしていないのに薄くなったお腹を撫でながら、わたしはぼんやりと湯に沈んでいた。

「帰り、奢るから美味しいものでも食べない？」

気を利かせてくれる友達にちよつとした笑顔を返して、一呼吸置いてから「嬉しいな」と言ってみる。

美味しいものってなんだろう。

今のわたしにとって美味しいのは、別れたあの男の腕で背中、唇なのに。それ以外はもう、味なんて感じなくなっているのに。

「ケーキバイキングでも行こうか。今の時期だとモンブランのケーキとかさ、ガトーショコラが美味しいよね、チョコレート類って幸せになる甘さよね。ショートケーキも好きんだけど。お給料入ったばっかだから任せて！」

「いいね、ケーキ。甘いもの食べると幸せになるよね」

あの人が好きだったチョコレート。もう、わたしはそれを一生口にしないだろう。あんな甘くて切なくて思い出だらけの幸せな食べ物。もう、二度と口にしない。

「……なによう、そんな顔しないでよ」

「あ、え、ごめん。……って、わたしが謝るのも変だわ」

サウナに入りながら、熱いのが苦手な友達はさっさと逃げ出してしまったけれど、わたしはぼんやりと座ったまま熱い空気に包まれていた。あの人と一緒にお風呂に入った事もあった。人の髪の毛を洗うのが大好きなわたしに、仕方がないと頭を貸してくれたりした

ものだった。身体を洗ってあげるのも好きで、でも泡だらけのスポンジと大好きな背中との間で格闘しているうちに、彼はするりとわたしの方へ向いてしまう。泡が唇に、と抵抗する間もなく、くちづけられてしまったらもうアウトだ。後はひたすら甘くて濃くてどうしようもない唇にわたしがもてあそばれてゆく。

あの唇がもうわたしのものではないというのが、この世で一番の悪夢だと思う。

思っても、もう仕方がない事なのだけれど。

ぼんやりし過ぎていたせいで、温泉から上がった時にはもうふらふらになっていた。先に上がって水分補給をしていた友達からは呆れられ、それでも風に当たればいいとドライブがてらケーキのお店に連れて行かれる。

茶色い木製の小さな店は、イトイン出来る可愛らしいところだった。

もうそろそろ晩ご飯の時間帯なんだけどね、と言われて時計に目を落とすと、確かに八時近くなっている。

「あれ、そんなに温泉入ってたっけ」

「思えば遠くへ来たもんだ」

「それって何だっけ」

「分かんない、誰かの言葉」

時間が遅かったせいで、店は開いていたけれどバイキングは終わっていた。それでも、メニューに写真付きで載っているケーキ達は魅力的で、友達ひとりではしゃぎながら注文を迷っている。

「何食べる？」

モンブランもいいけどイチゴのミルフィーユも気になるし、ホットケーキパフェってなんだろう、リンゴのパイも捨て難いしチョコもいいよねえ、とにこにこしている彼女を横目に、わたしは時計ばかりを見ていた。

八時に、帰るはずだったな、と。

八時の電車に乗って、彼の家から帰る予定だった。本当は、チケ

ツトも買ってあって、実はカバンの中に今も入っているのだった。もう、意味がなくなってしまった紙切れ。八時の電車に乗って、帰るはずだった。泣き腫らした目で。どうして元に戻れないの、と、駅のホームで泣いていただろう。わたしが選択しなかった時間に、存在したかもしれないわたし。

ウェイトレスが注文を取りに来てしまったので、カフェオレを注文した。友達は、それだけ？ と不満そうな声を出したけれど、湯当たりして食欲がないと言ったらあっさり信じてくれた。わたしの注文はすぐに運ばれてくる。

白い、ちゃんとカフェオレパウルに入ったやさしい茶色の液体。砂糖をいつもより多く入れた。ゆっくりとかき混ぜる。

幸せな、甘い香り。

あの人、苦いコーヒーを飲めないわたしの為にミルクを買っておいてくれていた事を思い出す。

すべてが、涙に繋がるのは、仕方がない事なのだろうか。

「……本当に、本当に、世界で一番愛していたの」

カフェオレは甘くて幸せな味がし過ぎた。遠い過去の記憶。あの人、唇や背中や、腕の甘さ。

「あの人以外に、大切なものなんて何もなかったの……」

一番届いて欲しい人に届かない言葉を吐き出しながら、わたしは両手でカフェオレパウルを包み込む。このやわらかな暖かさが、わたしを泣かせる。

つるり、と涙はこぼれて、途切れる事はなく、わたしは悲しい色の目をして声を失っている友達を前に、ただただ泣き続けた。泣くしかできなかった。

カフェオレが冷え切り、その甘さが中和してしまうぐらいまで泣き続けなくては、わたしの心は癒えないのだろう。泣くしかできなかった。本当に、泣くしかできなかった。

あの人を失くして、わたしは途方に暮れていた。どうやって生き

て行こうかと、小さく深く絶望して、わたしは幸せだった過去の為に、それでももう二度と手に入らないすべての為に、涙を流し続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0644m/>

カフェオレ

2010年10月8日14時38分発行